

巻頭言

新しい社会へ

宮崎 隆志(北海道大学大学院 教授)

この集会は協同集会と名づけられています。少々わかりづらい名称ですが、要は暮らしをめぐる共通の課題を一人一人の知恵と力を合わせることによって解決する取り組み、つまり協同の取り組みを互いに紹介し学び合おう、という集会です。これまでは協同組合がそうした運動の代表的な形でしたが、今ではNPOや志を同じくする人々による自発的な取り組みが多様に広がりました。現在、連合会を除く農協の数は約2千8百(農事組合法人を除く)、生協の数は約1千2百ですが、例えばNPOは約4万に達しています。

今回の集会の課題については後ほど、基調提案において詳しく述べられますので、ここでは簡単に触れるにとどめさせていただきます。実は協同集会と題された集会が北海道で開催されるのは、今回で3回目です。第1回は19年前の1993年、第2回は1995年に開催されています。当時は、バブル経済が崩壊し、北海道は深刻な不況に直面していました。1998年に拓銀が破たんしたのは皆さんご存じのとおりです。そのような下で、市民や働く人々が主体となった新しい問題解決の可能性が広がっていることを確認したのが、この2回の集会でした。当時は非営利・協同の取り組みと総称していましたが、倒産した企業を

労働組合が自主管理を始めた取り組みや過疎化が進む地域を協同組合による仕事起こしで活性化させた事例などが紹介され、分野や具体的な対象は異なっても、協同による問題解決という新たな方向性に活路を見出す可能性があることが参加者の確信となりました。

それからの約20年は、当時の集会で予感された可能性が広範な領域で現実化する期間になりました。1998年にNPOが法制化されたことは大きな弾みとなり、NPOは今では現代社会の仕組みを考える上で不可欠の存在になっていることは皆さまご存じのとおりです。したがって、今日のこの到達点にたって開催される本集会は、協同による問題解決の可能性を探るに留まらず、協同を現実的な力として定着させた新たな社会の姿を明らかにすることを課題としています。

それはまた時代的な要請ともなってきました。グローバリゼーションの展開はもはや誰の目にも明らかですが、協同の取り組みが広がったこの20年は、同時にグローバリゼーションに合わせた経済や社会の再構築戦略が明確になる時期でもありました。例えば、日本の大企業は少子高齢化によって縮小する国内市場に見切りをつけ、主要な市場を世界に求めています。

この変化は、これまでの社会像や人生モデルを転換させるような巨大な変化です。例えば、国際競争力のない部門を迅速にリストラするために、その障害である終身雇用は廃止し有期雇用を基本にすることが、1995年の日経連報告を初めとして財界筋からは事あるごとに主張されています。TPPによって切り捨てられる地域・産業は社会的なリストラといってもよいでしょう。その一方では、例えば大学に対して「グローバル人材」の養成と称して、英語によって授業を行い、地球上のどこへも飛んでいき仕事ができる労働者を供給することが求められています。かつての高度経済成長期には、日本人々は貧しさからの解放のために経済合理性を優先する社会を作り上げ、その結果、日本の社会と暮らしが大きく転換しました。今は貧困を逆手にとって、貧困に陥りたくなければ経済合理性をより一層高め、その合理性基準を社会の隅々にまで徹底させることが必要であると声高に叫ばれる時代に入っています。

しかし、その合理性が如何に危ういものであったかは、フクシマの4文字が意味するものによって、多くの人々に意識されはじめました。あるいはまた、不登校やひきこもりとして表現されている子ども・若者による異議申し立ては、その合理性なるものが人を育てる力をもたないことを告発しています。グローバリゼーションが押し付ける類の経済的合理性はもはや人間の社会の構成原理として正統性をもたないのです。人間的な自然から離れて暴走する社会の行き詰まりが現れたのが、現代といっても構いません。

この時代的行き詰まりが引き起こす諸問題に対して、それまでのやりかたの延長線上で対処しても解決できないことは明らかです。現代の協同の取り組みは、そのような課題意識に支えられているように思います。

今回の集会準備過程で、労働者協同組合の方々が100を超える協同の取り組みの取材を行いました。福祉・教育・環境・エネルギー・地域づくり等々と多様な領域を訪問したのですが、それぞれが独自に発展してきたにも関わらず、お話を伺うと大切にしているものやそれを実現する方法については共通していました。このことは従来とは異なる問題解決、つまり協同による問題解決が、まるで野火が広がるように、現代社会のあらゆる分野で同時多発的に起き始めたことを意味しています。

また、30歳代前後の若い担い手が多く生まれていることも特徴的でした。この世代は、いわゆるロスジェネ世代にあたり、若者支援の対象と見られがちな世代です。ですが、彼らこそが時代の行き詰まりの目撃者であり、それ故に、あらたな価値観と行動力で新しい社会を築く担い手たりえることも、私たちは認識すべきでしょう。

以上のように、これまでとは異なるスケールで、領域・世代を超えて広がる協同の経験を交流することによって、この集会が、誰もが人間らしく生きられる新しい社会を築く展望を明らかにする場となることを願って、開会の挨拶とさせていただきます。

(2012年9月29日、2012協同集会 in 北海道実行委員長開会のあいさつより)